

## ペットブームで考える職場環境

新型コロナウイルスの感染拡大前、職場に犬を連れて来られても邪魔だ、と思っただような人は覚悟が必要だ。新型コロナウイルス下のペットブームが、かつては想像もつかなかったようなかたちで職場環境を変えようとしている。

筆者は動物を飼っていないものの、ペットをとでも大事に思っている。ロンドンの家が広ければ、飼育を始めただろう。こうした人は英国に約320万人いるらしい。

労働市場の需給があちこちできつくなっていることを踏まえれば、多くの雇用主がペットに配慮した職場再開を計画しているのも不思議ではない。米国にある動物病院が企業の経営幹部500人を対象に実施し、2021年3月に発表した調査では、再び出勤できるよつになつたらペット

を職場に連れてくるのを認めるつもりだという回答が半数に上つた。

ペット用品小売りの英ペッツ・アット・ホームが「ペテイクット」というサービスを始めたのは自然な流れだ。犬を飼っていない人に迷惑をかけずに、犬に優しい職場環境をつくれるよう(企業などに)助言する。同社の従業員自身も、新しいペットが家に慣れるのを助けるために1日、仕事を休める。

こうした休暇制度は以前からあった。英北部スコットランドのクラフトビール大手ブリュードッグでは17年以降、新しく子犬や救助犬を飼う従業員が、1週間の有給休暇を申請できるようにした。

飲食店などに営業場所を提供する英ボックスパークのロジャー・ウェイド最高経営責任者(CEO)は、飼い始めた犬の面倒をみるために休みを申請した従業員の要望を認めるかどうか、SNS(交流サイト)でアンケートを実施した。新しく犬を飼う人が、休暇を欲しがるのはわかる。

一方で、(例えば)企業が育児のために男性に有給休暇を認めるのは、人間として合理的だろう。ところが実際には、男性の育休さえ未整備の企業が少なくない。

結局、アンケートの反対は約61%あった。様々な権利がもっと認められるよつになつたら正当化されるかもしれないが、現状ではやや行き過ぎだということになる。

(ピリタ・クラーク)



英文記事は  
こちら